

## 19 治療に苦慮した Complicated cyst の 1 例

林 和直・今井 径卓・佐藤 俊大  
五十川 修

柏崎総合医療センター消化器内科

症例は 70 歳代, 女性.

【主訴】発熱, 右季肋部痛.

【現病歴】2011 年 11 月中頃より微熱が出現し, その後 38 度台まで上昇し右側腹部痛も出現した. 近医より消炎鎮痛剤を処方されるも症状改善なく当院紹介受診した. 白血球 19200, CRP21.29 と高度炎症所見を認めた. CT で多発肝腎嚢胞を認め, US で肝 S5 に内部にスラッジエコーを認める嚢胞を認め, 1 本目の PTAD 留置した. MEPN 投与も発熱が継続し, 拡張した胆管に対し PTCD2 本を留置後も発熱は持続した. 第 26 病日にガリウムシンチで感染嚢胞を同定し, 2 本目の PTAD 留置した. PTAD よりトブラマイシン投与後に下熱傾向となった. LVFX を内服して第 110 病日に退院した.

【結語】多発肝腎嚢胞に合併した感染性肝嚢胞であり感染嚢胞の同定にガリウムシンチが有効であったが治療が困難な 1 例であった.

## 20 顕性黄疸にて発症し ABCB11 遺伝子変異により診断しえた妊娠性肝内胆汁うっ滞症の 1 例

阿部 寛幸・上村 顕也・眞水麻以子  
高橋 祥史・水野 研一・竹内 学  
野本 実・青柳 豊・上村 直美\*  
小木 幹奈\*・吉田 邦彦\*・山田 京子\*  
山口 雅幸\*・榎本 隆之\*・高桑 好一\*\*  
三嶋 行雄\*\*\*・木南 凌\*\*\*

新潟大学医歯学総合研究科  
消化器内科学分野  
同 産婦人科学分野\*  
同 総合周産期母子医療センター\*\*  
同 第一生化学教室\*\*\*

症例は妊娠 15 週の 24 歳女性で 1 か月続く搔痒感と黄疸で当院受診した. 血液検査では直接ビリルビンと AST, ALT の上昇を認めたが, 血清学

的にウイルス性肝炎や自己免疫性肝炎, 原発性胆汁性肝硬変等原因として疑う所見は見られなかった. 画像検査でも異常所見は認めず, 鑑別診断として妊娠性肝内胆汁うっ滞症 (Intrahepatic Cholestasis of Pregnancy : 以下 ICP) を疑った. ICP は本邦ではまれな疾患とされており, 強い搔痒感を伴い約 20 % に黄疸を認め, 胎児の周産期死亡率を上昇させる. 原因としては種々の因子が関連するが, ABCB11 や ABCB4 遺伝子の SNPs が発症に関与することが報告されている.

本症例においても sequence の結果, ABCB11 の Exon13 にアミノ酸変異を伴う SNP (1331T->C) を認め, ABCB4 には今までの報告にはない silent SNP を認めた. 以上より ICP と診断し, 報告をもとに UDCA と抗ヒスタミンを使用した. 治療後, 肝酵素および直接ビリルビンは緩やかに下降し, 出産後に正常化し, 症状も消失した.

【結語】本邦で初めて ICP の原因遺伝子の SNP により診断しえた症例である. 妊娠期における原因不明の肝障害では ICP の可能性を考慮する必要があると考えられた.

## 21 当院におけるレボカルニチン塩化物錠の使用経験

小川 光平・坂牧 僚・有賀 諭生  
津端 俊介・山川 雅史・平野 正明

県立中央病院消化器内科

症例は 60 代, 女性.

【既往歴】C 型肝炎, 糖尿病, 胆石性胆嚢炎 (胆嚢摘出後).

【現病歴】X-2 年 8 月肝細胞癌 (S8) に対して肝部分切除. X-1 年 1 月 PEG-IFN/RBV 治療開始するも副作用 (腎機能障害) で中止. 12 月投与量を減量して PEG-IFN/RBV 治療を再開. X 年 2 月肝性脳症を発症し PEG-IFN/RBV は中止. 3 月肝細胞癌の再発 (S4-8) を認め, RFA + PEIT 施行. その後, 肝性脳症を何度も発症するようになり, ラクツロースおよび BCAA 製剤内服を開始するが, 脳症遷延し随時 BCAA 製剤点滴を

行いながら外来フォロー。9月10日反応なく口から泡を吹いているところを発見。当院救急搬送され肝性脳症の再発で当科入院。

【臨床経過】入院時より連日BCAA製剤(500ml/日)の点滴を施行しなければ意識レベルの維持は困難であった。入院43日目には点滴量は倍量となった。入院51日目よりレボカルニチン900mg/日内服を開始したところ、徐々に意識レベルは改善を認め入院77日目にはBCAA製剤を中止としたが肝性脳症を発症することなく入院101日目に退院した。またレボカルニチン内服後に変動はあるものの血漿アンモニア濃度は減少傾向を認めた。

## 22 糖尿病外来より紹介となった肝障害の1例

津端 俊介・坂牧 僚・有賀 諭生  
 山川 雅史・平野 正明・石澤 正博\*  
 北澤 勝\*

県立中央病院消化器内科  
 同 内科(内分泌)\*

糖尿病患者の死亡原因の8.6%が肝細胞癌であるなど、糖尿病と肝疾患との関連は深い。2009年から2012年までの間に当院で経験した初発肝細胞癌例のうち、非B非C肝疾患由来の肝細胞癌は37例あり、そのほとんどがアルコール飲酒歴または糖尿病治療歴を有していた。これらの大半は非消化器科医からフォローされており、多くは偶発的に発見されていた。結果、ウイルス性肝炎由来の肝細胞癌と比較して予後が不良となる傾向が示唆された。一方で、消化器内科側からみても、肝細胞癌患者の糖尿病評価に対する認識は弱いと言わざるをえない。我々は、院内での勉強会などを通して、肝疾患と糖尿病との関係を周知いただくべく働きかけるよう試みている。ひとつの成果として、内分泌内科より肝機能障害の相談を得るようになってきた。ただ、糖尿病患者はその数が膨大である。医師側からのアプローチでは囲い込みに限界がある。当院では、糖尿病患者に向けた啓蒙活動の一環として、関係者により年1度

寸劇が開催されている。今回、この寸劇に際して肝臓病教室を広報し、教室では糖や食事と肝障害との関係につき講演した。内分泌内科医にもゲスト講演にたっていた。平時、当院におけるリピーター率は50%程度であったが、この回では参加者中70%程度が初めての参加だった。また、これまでの教室では肝臓病での通院歴がある患者が60-70%程度参加していたが、今回は20%程度であり、ほかには糖尿病やその他のかかりつけ患者、または医療機関受診歴のない方々だった。初めての試みであり、反省するべき点も散見するが、これまで情報に触れる機会のなかった住民や患者群に対して、肝疾患に関連した情報を提供することができるようになる可能性を感じた。

## 23 当院における肝疾患地域連携パス運用の実際と今後の課題

秋山 美加・斎川 克之・佐藤真衣子  
 大澤希美代・齋藤 浩生・石川 達\*  
 窪田 智之\*・吉田 俊明\*

済生会新潟第二病院地域医療連携室  
 同 消化器内科\*

## 24 肝疾患診療における病診連携の構築にむけた肝臓病教室の現状とこれからの課題

阿部 弘子<sup>1)</sup>・小山富士子<sup>1)</sup>・中野ともみ<sup>1)</sup>  
 植木 文<sup>1)</sup>・中山 陽子<sup>1)</sup>  
 長谷川江梨名<sup>1)</sup>・野口 博人<sup>1)</sup>  
 石川 達<sup>2)</sup>・吉田 俊明<sup>2)</sup>・深澤 尚子<sup>3)</sup>  
 鈴木 光幸<sup>4)</sup>・丸山 由華<sup>5)</sup>・廣澤 宏<sup>6)</sup>

済生会新潟第二病院看護部<sup>1)</sup>  
 同 消化器内科<sup>2)</sup>  
 同 栄養課<sup>3)</sup>  
 同 薬剤部<sup>4)</sup>  
 同 事務部<sup>5)</sup>  
 同 臨床工芸室<sup>6)</sup>